



歌集  
聽風

田邊誓司



歌  
集  
聴  
風

田  
邊  
誓  
司

目次

往還	七
磬梯・北京	一三
残滓	二
時計台	三一
故郷	三五
道東早春	三八
三浦半島	四五
詩の断片	四六
車窓	五二
あら煮	五四
信州	五七
夕潮	五六
秋郊	六四
虫のこゑ	六八

陶 泥	混 沌	さ み だ れ	両 子 追 憶	鳶 尾 草	川 越	文 体	神 田 川	年 明	歳 晚	鹿 児 島	夜 の 床	三 年 坂	道 東 晚 秋	都 市 の 繁 栄
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
三 六	二 八	一 七	一 九	七 七	六 六	三 三	二 二	九 七	九 一	八 六	八 三	八 一	七 三	七 一

雲 の 散 消	風 の み の 音	馬 頭 星 雲	野 薊	収 束	灯 火	梅 の 若 葉	八 重 桜	草 の 香	南 端 の 町	生 の 証 し	桑 の 実	村 の 闇	宇 宙 の 涯	理 想
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二 二 五	二 二 九	二 二 六	二 二 二	九 九 七	九 九 五	九 九 二	八 八 三	七 七 七	七 七 二	六 六 六	五 五 八	五 五 三	四 四 七	四 四 三

あとがき



—  
—  
—  
—

往  
還

常かよふ道のかたはら野茨の花羨しけれみづ  
みづと咲く

日の入りしうみざかひの空さびしきは埋火い  
るに冷むる雲塊

暗闇のなかに起こりし葉桜の音がこころの奥  
ふかく沁む

現身のゆゑの憂をもてあましわが歩みをり紫  
蘭さく道

飼ひをりし蝌蚪生長し次々にゐずなりしかば  
ベランダ寂し

甲あをき亀おもむろに首もたげ子のやる煮干  
むさぼりて喰ふ

圧されつつ日々乗る電車境遇の同じきゆゑに  
人を疎まず

たわいなき勤なりしと帰り来る夕べの街に食  
の香みつる

生けるものあはれといはん菜園に捨てし蝸牛  
が繁殖しをり

梅雨はれてうすらぎし闇アパートの窓近くま  
で静まりぬたり

雨のなか重く咲きぬしおしろいが夏日となり  
て命みなぎる

奥沢の町にしたしみ日々かよふ路に木槿の花  
の咲きをり

季ゆくを惜しまんとしていで来れば街の喧噪  
のなか安らけし

群れて咲く泡立草の黄をみれば常ゆく道が旅  
のごとしも

街裏の溝に生れたる蛙子のあはれ汚泥の陰に  
かくるふ

盛場のものうく閉ざす朝のみち線路の土手に  
虎杖の咲く

この都市は灯の塊りか午前二時光を帯びし雲  
が空ゆく

吹きぶりの雨葉桜に音たてて森深くゐること  
きときのま

十余年すぎて来れば等々力の丘は木暗く変り  
てゐたり

磐梯・北京

暁のみぎはに立てば猪苗代のみづつみ寒く霧  
たちわたる

ふるさとは遙かなりとぞ岩代の野に桑の実を  
摘みとりて食ふ

磐梯の山ふところにしづもりて沼は生活の影  
を映さず

みづつみのほとりに宿り寝ねがてにをれば寂  
しき風の音する

松毬の燻るにほひ旅にしてこのうつし身の奥  
深くしむ

山沼にそそぐ流に近づけばこころに沁むるそ  
の浄き音

五色沼を巡る

満たされぬ思ひ常あり深山に入りきて水の音  
にやすらふ

旅とほく来りて溪水に手を浸すわがなりはひ  
の延長あはれ

彩灯の余光くらきに串焼を甘栗を売る屋台の  
ならば  
北京にて

アカシアの莢実すがしくとりとめのなく広がらん国に来れり

宮殿の敷石の庭ゆき行けど同じところに迷へることし

国交の成りし日のことおもひ佇つ天安門万豊の鋪庭の内

ひろびろと見ゆるは林檎の畑にて燕山麓の秋  
ゆかんとす

目に沁むる彩乏しきに長城のふもと明るし櫨  
もみぢして

午後の日にあはくけぶりて紅葉せる尾根の行  
方に長城つづく

岩肌のあらはなる山いづこにも黄の小菊さく午  
後の曇に

岩山のそばだつ尾根に薄日さし八達嶺無窮の  
時のただなか

吹き上ぐる風冷やけくはるばると来し長城の  
石道上る

練炭を山積にして若者はおもき荷車をいづこ  
へか引く

残 滓

わが生れし村秋されば山峡の田にみづみづと  
稲穂のそよぐ  
ふるさと函子に帰りて

櫟林の茂りしたしきこの山に來りていこふ風  
の音のなか

菜園に殖ゆる蝸牛月の夜に群がりいでて甘藍  
を喰ふ

秋日てる街にいで來て休日の人々の顔みれば  
やすけし

木犀のかをる日暮の街帰るさいはひといつ  
つましきもの

振動を足裏に感じ地下鉄のとほる真上の路あ  
ゆみをり

みだれなき一連なりに飛ぶ雁の群をし見つつ  
羨しくゐたり

歳時記にかつて読みしが目のさきに雁帰りゆく  
壯観にして

東の空さむざむと明けゆくを降誕のかくあり  
けんと見つ

やうやくに寒さ沁むるか常の道菊も山茶花も  
浄らかに咲く

かきくらし時雨寂しく降るゆふべ早く歸りて  
子の顔を見ん

小春の街歩みをりすぎゆきの憧憬いまはほと  
ほとおぼろ

晩れてゆく歳に焦燥ともなへど幾許希望のご  
ときを感ず

夜の時雨ふれる音のみ東京のこの一角に寂し  
さ満つる

檜などの黄葉あかるき林間の尾根道を行く躰  
冷えつつ  
石老山いしろうざんに遊ぶ

大根のあをく生ひたる山畑に心いこふなど一  
日歩みき

吹きぶりの雨に公孫樹の黄葉のさだめなく飛  
ぶ三年坂は

工事する音のかすかにきこえる居間にまど  
ろむ冬日を受けて

板の間に日のさしゐたり歳晩の休日の午後時  
ゆるく過ぐ

故里に帰り来りて現身にひびくしじまにひたりてあたり

暇なき日々の過ぎつつ通ひ路に見し菊おもふ夜の臥床に

新橋の駅に入るとき懐しき種油の匂す菓子売場より

議事堂のしづもりみたり暮れ泥む汐見の坂を  
上り来し時

冬の日のうつろふ居間に単簡となりて終らん  
ことしをおもふ

部屋にさす冬日あたたかく一年の残滓のごと  
き心を送る

おもむろに恢復しくる日に照りて草芽吹きを  
り裏畑寒く

鶴見より風吹きくだるあしたにて潮の香あら  
き馬珂貝を剥く

あぢさゐの咲く一ところ雨の香のとどこほる  
道わが帰り来つ

幼子をともなひ来たる山道に秋の蕨をつみて  
さびしむ

久保殿山にて

農家にて生れし縁か藪山に入りてことしも自  
然薯を掘る

冬の日をあふぎて立てば一億五千万粒を来る  
この暖かさ

時計台

夕映の朱と暮色をあはせもつビルやすらけし  
しばらくあふぐ

冬日てる道にいつしか疾風やみ櫛の葉群がま  
ぶしく光る

うつし身にめぐりゐる血のしたしけれ大寒す  
ぎし夜の風音

居つくことなき町にしてゆきずりのごとく椿  
のさく花あふぐ

奥沢辺り

ピルの間に沈む夕陽をみてゐたり風うら寒く  
身を晒しつつ

中空を雲間過ぎんか議事堂の照陰りするさま  
ものものし

日溜りに蔦の葉群のあをあをとしづもりゐた  
り受容なき都市

あわただしき常の往反に沈丁の蕾膨らみひら  
かんとする

霞が関三年坂

ふるさとに人の減りたる相對とおもひて街の  
雑踏を行く

金錢のことにて妻と諍へばこころ奈落におち  
ゆく如し

やうやくに寒の緩みし街来れば丘はればれと  
時計台みゆ

伝達のあしく流るる現実のもどかしくして働  
くわれは

日蝕の日に彗星の近づくをおもふも心ゆたか  
ならずや

故  
郷

故里の静まりかへる道をゆくゆきずりに遇ふ  
人とともなく

富永から両子まで歩む

出でてより三十年か故里の春田いづこも日に  
照りわたる

ほしいまま咲く蠟梅の一木ありただに青き空  
音のなき道

帰り住むことなき村かなどおもふ春立ちてな  
ほ寒き山川

ただならぬ静けさのなか歩み来る道の一里に  
人を見かけず

この村に生れて逝きたる人おもふ山にこもり  
て吹く風の音

さきがけて鋤形草の咲くところ  
函子の山の息  
吹へ歩む

道東早春

氷点下十度はあらん踏む雪の音すがすがしそ  
のきしむ音

しばらくは羽搏おもく上りしが白鳥ゆけり気  
流に乗りて  
コッタロ湿原

飛来せし丹頂の鶴ひとたびは宙にすがりて雪  
に降り立つ  
鶴居村にて

むつまじく幼き鳥をあひにして伴ひ来たり親  
仔の鶴は

いつ解くる沼とも知れず雪折れの葦ことごとく閉ざして凍る

達古武沼

歳月をかけて底ひに育ちるん毬藻恋ほしみ氷湖をあゆむ

阿寒湖

峠より雌阿寒の山とほくみゆ雪のはだへに噴煙上げて

うつし身の心許なく真向かへばカムイヌプリ  
の山かうがうし

昼ふぶく氷湖にさへや命継ぐものありくろき  
海豹いこふ

遠く来し美幌の丘に汚れなき雪をかじかむ手  
に掬ひけり

白樺の林明るしおのづから根方の雪に照りあ  
ふごとく

オモタイの渚村とぞきく辺りオホーツクの白  
き氷海みゆる

超ゆるなき力おもひて佇めり氷海ひろく昏れ  
ゆかんとす

荒びたるままに凝りし氷海か視野いちめんの  
うつつなき白

とほきもの泪ぐましも残照の及ぶ宇登呂の氷  
海に立つ

夕茜せる氷海の果ての空こころ鎮まりて佇み  
あたり

斜里の海を閉してゐたる流氷が朝明けしかば  
岸離りをり

限りなく氷塊浮かぶ海となりたゆたひの音氷  
の裂くる音

さへぎりのなき起伏をふりさけて立つ雪原の  
円環のうち  
多和平にて

三浦半島

ふるさとに離りて住めば浜大根さける渚に心  
やすらふ

外崎家の人らと三浦半島に遊ぶ

歩みゆく浜のいづこも防風の葉のあをあと  
砂に生ひをり

右に左に篠竹生ふる岬道の柔らかき土踏み  
あゆめり

詩の断片

街灯の明りに映ゆる夜桜を見上ぐれば花に白  
き雨ふる

十二歳となりし娘のたくましく此の頃妻と並  
びてあるく

木蓮の花は日ましにみづからの葉に埋もれて  
ゆふべ明るし

あかつきの潮騒きこゆ覚めしのち意味うすれ  
ゆく詩の断片

をちこちに四照花さく五本木の風かくはしき  
道あゆみ来つ

鼻風邪に喘ぎをりたる妻寝ねて今日一日のや  
うやく終る

梅雨きざす雨さむざむと降る日にて何すると  
なく家籠りをり

自らを奢侈によそほふ人々にまぎれてけふも  
街に暮らしつ

浴室にて娘と妻の語らひをり快活なるこゑ穩  
やかなる声

バーチャルといふ具体なき空間に子らの遊ぶ  
とききて憂ふる

ひとときの安寧のごと梅雨晴に音なく立てり  
街路の木々は

街中にはつかに土のあるところ黄のつつまし  
き田平子が咲く

芙蓉さく頃としなりておもひいづ春来りなば  
この街去らん

勤にて橡の樹下を日々とほる大き実ひろき陰  
豊かに思ひて

街頭に茂れる橡の大樹ありひろく風かよふ下  
蔭をゆく

花閉づる芙蓉の側を帰り来つ一日勤めし脚の  
おもたく

車窓

けぢめなき梅雨の曇にくろぐろと海昏れんと  
す旅ゆくわれに

有り余る時がたのしく暮れてゆく海を列車の  
窓に見てをり

生産のなき空間として見ゆる町中心部を占む  
る墓原

昼くらき曇に染まず襷あらし煙噴きをりえん  
とつ高く

煙突のけむり親しくみゆるまで昭和のとほし  
製紙の町に

生産を促すちからなきことき町が寂しも車窓  
にみえて

あら煮

赤き土赤き岩ありはるかより火星地表の映像  
とどく

みるかぎり命なからん空間かかくも遙けきう  
つつの地表

瑕瑾なき初元のちから認むれど火星と地球い  
かに関はる

生くる物なき地表にてあかく見ゆ星おのづか  
ら運行しつ

たのめなき心地こそすれ明方の窓に響きて小  
綬鶏鳴けば

子とわれの心いやしし緑龜死にて帰郷の思ひ  
のつのである

隣家の桜木に蝉の鳴くきけばあかねさす昼ゆ  
ゑなく寂し

噴水の音がしけれ奥沢の駅の広場にしばらく  
くいこふ

わがうちに焰だつもの保ちつつ鱒のあら煮を  
灯の下に食ふ

信  
州

さわだちて水巡りゐる濠うちに烏城くろく空  
へそばだつ

姨捨の駅に列車の停りしが向切り替へて上り  
始むる

鉄道の途切れしところ藪草にからみつきたる  
昼顔のさく

紛れなきものの浄さとおもはんか真なる闇は  
紺色に顯つ

長野善光寺戒壇

かかるまで惑ひある身と思ひけり闇をくぐり  
し心の澄みて

黄月忌すぎしが暑さきびしかり小諸の道は土  
いきれ立つ

糊空木のはな衰ふる宮居より妙義の山の尾根  
せまりみゆ

峠道をいくども曲り下りくれば風に吹かれて  
萩の咲きをり

わが来たる碓氷峠は道のべに岨菜咲きをり秋  
づく風に

夕潮

まなしたに能登の明るき渚みえ離岸堤のうち  
波砂を喰む

くるぐると段なして来る夕潮がなぎさの朱を  
消しつつ終る

とめどなく寄せ来るうしほ幾段の面おのおの  
の暮色を保つ

人工の星光りつつ移りゆく響み寂しき海のうち  
への空

やはらかき渚の砂を踏みて立つことしも来ま  
く欲りぬし渚

烏賊舟の灯ふえつつ陽の落ちし海の沖辺にみ  
えてただよふ

この道によたび来りて身にあむるみのる稲田  
の歡喜の光

あさあけの川の葦生に隠ろひて鴨の餌をとる  
水音のする

いづこにも草雲雀鳴きこの秋も稔りに入るか  
宇ノ気の町は

ひえびえと翳れる雲の起伏なす雲海の窪みえ  
て過ぎ来つ

秋  
郊

暮方の日のさしてゐる塀に寄り鳳仙花さく埃  
かぶりて

百日紅の花やうやくに衰へて常ゆく路のかた  
はらにみゆ

草の穂の立つべくなりぬ半年を経たらば去ら  
ん町に住みつつ

ものなべて人の心を映すとふかかる密集に人  
やすらふや

ひえびえと降る宵の雨外灯のひかり親しくわ  
がかへり来つ

橡の木の影にいつしか親しまず秋の日差のあ  
たる路ゆく

さまざまに向く大蓼の花群をしとどに濡らし  
秋の雨ふる

脚おもく歩み来りしが公園にちかき歩道に木  
犀にほふ

たまたまの仕事に通る油面めづらしき名の町  
も萩さく

がまずみの朱みづみづと実の熟れてけふ憂な  
し霞が関に

虫のこゑ

寒暖の著ければこのひごろ頸のきしみて勤に  
いづる

ひすがらの残暑に倦みし日の暮に廓然として  
雨つよく降る

俗塵にまみれたる身を嘆かんか虫のこゑ澄む  
未明の床に

苦しみの瀬のごとくにうつし身にとどこほり  
ある時を悼まん

紡ぎゆく絹の如しと独りきく虫の音ちかく遠  
く未明にぞ澄む

やうやくに雨のやみたる秋の夜たへがたきま  
で臥処しづもる

故里に歸りたしとぞ言にいで子に聞かれしを  
しきりに悔む

蟋蟀の声まさりゆく夜のほども遠くエンジン  
の高鳴る音す

都市の繁栄

あかつきの空に鳥の鳴くきけば鳥といふもた  
ふとく聞こゆ

人なべて寂しきものか隣人と睦むともなく寄り合ひて住む

銀座のパン屋に入りて並びたる美しきパンに息のむわれは

一都市のかかる繁栄敷衍して国さかゆるといふ人ありや

一枚の田さへなき町人々は季にかかはりなき  
ごとく住む

道東晩秋

ななかまどの朱に色づく頃となり秋終らんか  
はや帯広は

十月の寒さ身にしみ立てる間も摩周の丘に雲  
せまりけり

暮れてゆく標茶のあたり単調にひろき寂しさ  
林も道も

農村に暮らさんと常希へるに町なくくらき大  
地が寂し

時ながく森の暗さを見しのちの彩灯ともる町  
のやすけさ

四年経て来しオンネトー十月の水かがやかず  
暗く湛ふる

弟子屈に晩秋の日はや暮れていづこも寂し  
旅にしあれば

たえまなく海よりの風ふく岬浜茄子の実の熟  
れし道ゆく  
野付にて

左右より海蝕すすむ湿地にて化石さながらト  
ドハラの立つ

オホーツクの海迫りたる湿原を踏めばかすけ  
し水にじむ音

峠道ゆくをりふしに開発を断つ山脈のみぢ  
が見ゆる

産卵に上らん鮭を捕へんと漁師の群れて河口  
に立つ

川原に鮭の骸のいたいたし命を継がんと  
みの果て

遡上する鮭の憐れはかぎりなし傷をもつ身の  
ひたすらにして

水榭もいたやかへでも黄葉してめぐる林に風  
かよふ音

ふく風に熊笹の丘うちゆらぎ斜里山麓は秋ゆ  
かんとす

知床の紅葉のころ短しとをとめごいふを侘し  
みて聞く

饅えたるがごとき板の香幾千の罪業のしむ牢  
獄ここは

ひろびろとつづく緑のビート畑刈り取る頃は  
冬近からん

いましがた雨降りしかば紅葉の山のいづこも  
光うるほふ

層雲峡

そそり立つ岩の高処にいづる水たぎち落ちつ  
つ紅葉にしづむ

こすもすのさゆらぎとをり晩秋の大地巡りし  
果てなる心

三年坂

ビルの間の歩場あかく蝉さわぐ昼の日比谷  
は人疎らにて

午後たくるころ木犀のあはき香ののこる樹園  
の歩場にいこふ

とめどなく行き交ふ車みるたびに人を急がし  
むるものあはれ

夕風にふるへるとき声に鳴く蟋蟀したし帰  
り来るとき

東京につひに馴染まず日々を積む三年坂の行  
きに歸りに

東京に三年暮らし失ひしもの得たるものいま  
にうべなふ

夜の床

けふ一日仕事を休み夕づきてゆく空のいろ床  
よりあふぐ

ジヨンデンバー逝きしが悼む声きかず六十年  
代いよいよ遠し

稀に弾くギター拙くジヨンの死を人ごとなら  
ずひとり寂しむ

穏やかに常ものを言ふ人なりしに命断つまで  
悩みをりしか

夜の床に掌にて撫づればわが顔のかくも小さきことを憐れむ

種のなき柿を食ひつつこの頃は何もおもはず種無きことに

自省心すこしはあれど休暇とり家ごもるけふ躰のかるし

先生の遺品とぞいふウイスキーたまはりて今  
夜枕べに置く

鹿兒島

咲きのこるはデイゴの花かたもとほる鴨池辺  
り秋の日寒し

宿酔の躰のおもく海見んと加治木の駅にひとり降り立つ

冬ちかき渚辺の町ふく風にこすもすの花すがれつつ咲く

朝曇る加治木の港あわただしトラック来り砕石を積む

岬山に添ふるがごとく神造辺田の小島わたな  
かに風ぐ

なだらかに裾野したがへ桜島の山雄々しけれ  
曇にそびゆ

海に向く武家屋敷町鳩十のかつて住みつき童  
話創りき

秋ふかき網掛川のほとりゆく旅にて常のしが  
らみのなく

そそり立つ断崖に水現れてそのいくすぢの纏  
れつつ落つ

石敷にして奥山へつづきをり竜門司坂参勤交  
代の道

滑止めの残痕ならん糸みゆる石敷のみち古り  
て苔むす

竜門司の坂を上れば町へだて桜島とほく見え  
て明るし

稲架のたつ刈田明るくゆきずりの隼人の町は  
昼の静けさ

石塔に彫りし如来に思ほゆる千年まへに滅び  
し部族

飛行機に上りゆくとき開聞岳遠々にして秋空  
に浮く

歳  
晩

路上にて装飾品をならべ売る西欧人のかたは  
らかへる

些細なる言にて妻と諍へば部屋しづまりて寂  
しく寝ぬる

ふるさとは茶の花のさく頃ならん小春の街ゆ  
きつつ恋ほし

日々ふゆる櫛の落葉わが踏みてこの坂行くも  
あと幾月か

百合の樹の黄葉疎らに霜月のをはらん街か往  
反の間に

ゆきずりに柊の花愛づるなど街に三度の冬を  
迎ふる

降る雨に公孫樹の黄葉ちり敷ける舗道を帰る  
こころ貧しく

身に刺さるごとくに風の吹きしきるビル街を  
来つ落葉踏みつつ

よりどなく心揺らげばひたすらに鎮めんとを  
り夜更の床に

朝まだき音は時雨の降るらしくこころ寂しく  
覚めてききぬつ

一年の身に積りたるおほよそは悲しみにして  
しばし嘆きつ

三年の任務のおもく赤坂の路に公孫樹の落葉  
をぞ踏む

何するといふ意欲なく歳晩の日のさす居間に  
をりて安らふ

この年の仕事からうじて終へしかど敢へて喜  
ばず健康のため

歳晩の時ほしいままに逝かshめて今年のこと  
を忘れんとあつ

妻と子に依りてぞ得たる安寧のかくありがた  
し歳晚れんとす

年 明

どんど焚く煙のほひ懐しくしばらく憩ふ札  
燃やしつ

八日間家に籠りて年を送り年を迎へてこころ  
やすけし

先生の遺志に辛うじて導かれ過ぎ来し日々か  
この幾年は

あたたかき冬の日差に梢まで枝光りゐる公孫  
樹をあふぐ

雪の降るけふの一日部屋ごもり無為にゐたれ  
ば心やすらふ

融雪剤の残りて乾く坂くだるかつて通ひし見  
附のあたり

排気にさへ都市を感じし日の遠く議事堂傍の  
慣れし路ゆく

街空の茜に雲のすぢひきて飛行機のとぶ上昇  
しゅつ

自らを顕示するなくありのまま老いて死にた  
る祖母の偲ばゆ

冬霧にやすらふごときベル群がわが目の下に  
あはく静もる

煤けたる塊となり雪のこる路あたたかし日の  
匂して

公園のかたはらにして木立より冷たき風の吹  
く路あゆむ

吹き荒れし風いつか息み裸木となりし街路樹  
に日の当りをり

神田川

街川に鴨のあそぶと見とめれば僅かに生ふる  
水草を食む

大叙父吉武好孝を偲び杉並を巡る

芽の吹くはまだきとみゆる桜の木さむく日に  
照る川端のみち

遊び場の何号として管理せる公共空地に梅の  
咲きをり

この町にふたたび来ることなけん神田川の流  
すぎて音なし

文  
体

わが家にひとりちからの漲れる娘をみつつか  
すらひの湧く

このひごろ心を満たす歌などの見当らずして  
寂しく過ごす

夢にして歌の出来たることなどの此の頃無き  
は怠惰のゆゑか

随想を書きつつおもふ文体は恐ろしまざまざ  
と心を映す

随想「風立つ村」を書く

いつしかに眠りて覚めし夜の更に昨の疼きの  
内に癒えずも

西日さす枝にはつかに朱帯ぶる公孫樹並木の  
坂歩みゆく

寒さなほ残れど日差あかるきに園を歩めば森  
の香がする

川  
越

川舟の舳ひありけんこの辺り沼に変わりて青み  
どろ生ふ

ひとつひとつ顔の異なる羅漢にて衆生の悲喜  
をいまに伝ふる

僧衣まとふ羅漢の姿あはれまん悟を得たるご  
とき顔なく

鳶尾草

歸郷する日の近づけば苦しみて通ひし坂もし  
たしく歩む

荷作りをほぼ終へし部屋二年間住みし思ひに  
しばらくひたる

鳶尾草の花白く咲きけふ一日かぎりには去らん  
街に見とむる

両子追憶

未明より父母のこゑして池はたに溝つくるは  
ん山土を練る

浪曲の興行きくとわが家に人ら集ひて夜を更  
かしむ

天井よりさがりし蜘蛛を吉兆といひ曾祖母が  
客来るを待つ

ぼうぼうとカーバイドの火赤く燃え夜更の川  
に魚漁りゆく

川なかの平たき石に眠りゐて夕べ覚むればお  
もき水音

藁塚の背にあたたかく口数の少き父と空あふ  
ぎみぎ

籾殻の燻りあつた暮れしかば草深谷にたつ音  
のなし

椎茸の乾燥小屋の窯処より薪燃えさかる音の  
きこゆる

縁側に曾祖母ひとりいでてをり稲刈しゐる遠  
田を見つつ

やうやくに冬の来らん道端に茶の花白く咲く  
鎮魂のごと

はじけつつ青木の青葉燻るも焚火たのしき日  
の暮のころ

竹筒に吹き起こす火が沸し場の暮色のなかに  
しばし息づく

雪ふる日母は床下の芋釜にもぐりて夕餉に食  
ふ芋さがす

久びさに獲れし兔を喜びて父がひぐれの庭に  
て捌く

冬の夜の庭にあふげば覆ひくるごとく銀河の  
星々ひかる

いちめんに雪つむ田畑春よ来よ眠り惚くる蛙  
らに来よ

死に近く病み臥す祖父を悲しめど近寄りがた  
し言葉知らねば

堪へがたきことあれば来て山宮の苔のつめた  
き石に坐りぬ

ながく臥す祖父あはれ威厳なき眼となりて泪  
たたふる

わが父に従ひ来れば灯の暗き座敷に祖父の息  
絶えんとす

ひとしきり蝸鳴きし日の暮に灯りしたしく麦  
飯を食ふ

今宵また土間にてくつわ虫の鳴きかくて寂し  
き夜更けんとす

しんしんと雪積む夜は早々と行火を抱き寝ね  
んとぞする

憂ふるを感じをりしが唐突に兄は都会へ出で  
ゆきにけり

さみだれ

雀鳴く声をしたしくおもふなど帰郷翌日のあ  
した目覚むる

中学生になる日近づく娘にてことば少く家こ  
もりある

帰り来し両子の谷やまなさきの川洲にあふれ  
菜の花が咲く

半月がすぎたるのみに東京に暮らししことの  
すでに遠のく

歸郷して一月足らず音便のしるき訛りに娘は  
話す

二年間空けたる家の庭なかに茂りすぎたる木  
の枝を打つ

庭なかに蒲公英のさき田平子の咲けるも親し  
わが家なれば

ゆくりなく雷鳴りてより庭に敷く砂利に音た  
て春の雨ふる

頑丈になりしわが子が目の前をときに威風堂  
々あゆむ

海猫の鳴くこの波止場この町に帰りし思ひに  
やうやく浸る

家族みな寝静まるころおのづから勤をうとむ  
衝動のわく

麦秋の頃にかあらん三年前祖母の逝きたるこ  
とも遙けし

職に就き二十四年か身につきし方便ときに疎  
ましくして

つづまりは孤独に生くるものならん勤の不安  
誰に言ふべき

友のゐて安かりし日々いつか過ぎ何にすから  
んうつつ心は

雀鳴くこゑに目覚むる幸ひを帰郷してよりあ  
したにおもふ

夜更けてさみだれの降る音きけば勤にすさみ  
し心和ぎゆく

東京に暮らしし日々の遠ざかる思ひにひたり  
さみだれを聞く

いつ知らず子ら成長し各々の部屋に入りたる  
夜更しづけし

さみだれの音に心の和ぎゆけば寝ねんとぞ思  
ふその音のなか

渾身のいのちを腕に込めて走る車椅子選手ま  
なさを過ぐ

口にする不平をときに聞き知るか子らの悲し  
き顔を見とむる

混沌として行方の知れぬ経済の内にしありて  
日々に生きをり

宵寒き川のほとりに待ちをれば寂しき闇に螢  
のとべり

四照花の咲けばおもほゆ通ひたる五本木の道  
遠くなりたり

とめどなく降るさみだれを夜の更にききて心  
の一時いこふ

静けさにひとりひたりて夜を過ごすわが幸ひ  
を妻さへ知らず

さみだれの音したしきは幼き日兄と納戸にき  
きし雨音

をりふしに心やすらふことのあり子の積極の  
光ることとき時

朝ごとに子の成長をよろこびてわが希ふもの  
とりわきて無し

余裕なき日々は現のなりゆきか憩へる時も勤  
をおもふ

昏くらきくぬぎ林となりにけり父の生家とい  
ふもかなしく

海の見え蜜柑植ゑある家なりきくぬぎ林のな  
かにわが立つ

混  
沌

観念の渦に没することくにて日々議論し書類に追はる

とめどなき流ならんか渚への聚落過疎の例外ならず

ふるさとの山には葛の咲く頃か疲れしところ遠くにあそぶ

懐しき思ひに覺めて混沌をたどれば古りし別  
離におよぶ

おもひ草咲く頃にして野にいづることさへも  
なし勤に疲る

けぢめなく海暮れてゆく寂しさにしばらく浸  
る帰路の電車に

勤め人ゆゑの憂ひとうべなへり陶作りつつ心  
やすらふ

癒ゆるともなき混沌をおのづから身に保ちつ  
つ年も暮れんか

陶を焼くこと学びをりふるさとに帰り住まん  
とわが望むゆゑ

余裕なき日々にしあれど命生くるためと思ひ  
て深く嘆かず

いく枚の棚田に秋日さしをりて寂しきものか  
人なき道は

国民文化祭講師として秋葉氏来県四首

しばらくは上りてくだり来る道に一連の風棚  
田より吹く

午後の日の軟かにして山峡の畑に咲きゐる野  
蒜にも照る

懐かしき人にしたがひ自らも行人として秋日  
にひたる

間伐をするなく荒れし杉山の暗きなだりに山  
芋を掘る

三階の職場のくらし通路より黄ばみしけやきの  
梢がみゆる

水涸るる川のほとりに幼き日わがたふとびし  
数珠玉を摘む

四元氏来県一首

経と緯の一隅にして獅子座より流星の降る時  
を待ちをり

やうやくに歳も晩れんに未だなほ収束せざる  
ものもて余す

採り残しおきたるかぼす黄に熟れて多忙極め  
し歳ゆかんとす

屈託のなき子らの声歳晩のあわただしさはそ  
の声になし

をさなき日遊びほうけし山畑に母の培ひし大  
根を抜く

陶  
泥

枯葦のあひを流るる水みえてけふ歳旦の日差  
を反す

光りつつ流れてゐたる古里の川おもひをりさ  
むき臥床に

葦群の枯れふすひまをゆく水の流がとほく朝  
日に光る

かたはらに寢息をたててゐる妻の異なる過去  
をいまは思はず

風邪ひきて思ひ知ること同僚のおほよそわれ  
に關心あらず

夜半覚めて軽くなりたるうつし身を喜び春の  
疾風を聴く

聴風居と戯れて呼ぶこの家に冬は寂しく風ふ  
く音す

ひすがらに陶泥漉せば古里の山のにほひに心  
うるほふ

澄みとほる賛美歌のこゑ日々傷みうつつに倦  
みし心にしむる

おもむろに春は来らんあかつきの空に接して  
海くろくみゆ

夜更けて帰り来れば義務に似て家を守らんだ  
めの豆撒く

水に漉し陶泥となる赤土の輝みつつふるさと  
おもふ

歯の抜くる夢より覚めて心底の老を怖るる無  
意識おもふ

暖房のなく底冷のするビルに休日けふもひとり働く

姿見にみつつき思ふしたたかになりたるわれのこの頃の顔

朝まだき頃に起こりし風の音ききつつ寝ねんこころ寂しく

一年間悩まされたる計画のやうやくに成る潮  
引くごとく

久々に庭に出づれば梅の木は花散り終へて葉  
の芽吹きをり

辛うじて仕事を一つ終へし日に町に馬酔木の  
花さくを知る

理想

港よりきこゆる音は朝早く発つ船の音とほく  
響かふ

噺れし声は尾長の餌を欲るか春のまだきの窓  
外に鳴く

ふるさとに住む場所のなき現実を諾ひをれど  
しばしば思ふ

東京に発つ日近き子この町を古里として出で  
ゆくならん

いづこにも桜咲けれどこの日ごろ明るきもの  
に心いこはず

この町に生終ふるかと唐突におもひいでつつ  
鋪道を歩む

東京へ子の出でゆけば居間ひろしこころ寂し  
く夕餉を終へつ

ぬぐひ得ぬもの内にあり夜遅く春の疾風をひ  
とり聞きぬつ

村を棄て生き来りしか子のいでし居間広々と  
過去思はしむ

草の香の匂かなしも街人となりし思ひに蕨を  
ぞ煮る

成長をしゆく娘を見るにつけ理想をいまは遠  
くに置かず

宇宙の涯

暮れなづむ郊外の山あをあをと見えつつゆふ  
べ帰り来りぬ

民族の浄化などといふ愚のありて戦争は常か  
くして起こる

実を結ぶ柚のかたはらおほ母の墓に参りて五  
年を祭る

軋轢のなかみづからを護りつつけふも働き今  
日も疲るる

われをみる子らの視線にこの日頃おもさを感じ  
ず何おもひぬん

日によりて妻の実家に寄るといふ犬の意識や  
いかなるものか

想像が理性をこえて世の中を価値づくとふ  
論におどろく

ひえびえと九月の雨の降るゆふべ遅れいでた  
る油蝉鳴く

誰彼となく不景気をいふ日々  
に夢をもてなど  
子らには言はず

混沌としたる経済のうち  
にゐて消極つものこ  
とを寂しむ

辛うじて勤め得たりとおもふ  
日々忘れたければ  
日記をつけず

希ふものさして多からず  
鉦叩の声のきこゆる  
書斎にいこふ

むし暑き日々の終りて  
彼岸花さく日朝から雨  
に雷鳴る

台風のただ中に居り  
窓外に鉄を引き裂くこと  
き音する

古里の土にいだきし執着のあはくしなりてこ  
の町に住む

遙かなる昴にこころ映すときあはれ宇宙の涯  
にわが住む

ふく風の音を聴きつつ寝につきぬ二十年住む  
家の親しく

尋常ならぬ心みづから怖れつついで来りたる  
川原にいこふ

胸襟をひらくはもはや妻子のみかありがたく  
して今夜も憩ふ

村の闇

古里に帰り来れど部屋ごもる父としなりて逢  
ふこともなし

しんしんと差す秋の日や帰り来し古里はわが  
住む谷ならず

立冬の海風ぎて鷗しろく飛ぶ動けるものの親  
しく見えて

臥処にて時つぶす間もおのづから嘗みをらん  
細胞あはれ

噴きいづることとき生への執着をうべなひ今夜  
切肉を食ふ

彩色の光つやけき宴にゐて灯のなき村の闇お  
もひいづ

ふるさとの畑の泥にて成しし山ながく乾かず  
草芽吹きをり

古里にこだはりをもつ自らを此の頃疎ましく  
おもふことあり

積極をとり戻さんと通ひ路にこぶしを握りし  
むることあり

豹変をされたる者もせし者もともに疲れて勤  
めむなしも

父われの保護うとましき年頃か黙す娘と夕飯  
をくふ

竹群をふく風の音ふるさとに帰れるたびに近  
く聞こゆる

桑の実

落味嚙の苦さめでつつそこはかとなき寂しさを  
うつし身にもつ

羞らひを内にもてれど困りより身を守るため  
眼を据うる

野に山に育まれしが街に住むなりゆきにして  
心すさびつ

得体なき不安の兆すをりをりにかかるが常と  
おもひ諦む

堂々と遂行さるる不合理が勤めて二十五年う  
つつ身にしむ

衰ふるなき春はやち満身の孤独をいよよかき  
たてて吹く

静かなる大敗とわが認めをり異動内示を受け  
しときのま

自らを醒ます自らのこゑありとこころの神秘  
おもふをりふし

幼子をともなひかつて来し浜は春の日さむく  
諸葛菜さく

しほさゐの聞こえて寒き道来ればいづこもな  
づな花の咲きをり

痛恨を断ち切らんとし浅春の風さむく吹く浜  
に佇む

ときのまの優しさに似て萌えいでし柊の葉が  
日に光りをり

吹く風の強けれど一片の雲もなき日のたふと  
くも陛下にまみゆ

全国植樹祭にて

パンジーのはな紫に咲く丘に一万の人森をた  
たふる

御手づから植ゑたまひたる幼木のたけく繁ら  
んことを願ひつ

わが先祖善三郎の戦死せし鎮台にして樟若葉  
鳴る

熊本城にて

光芒の散らふがごとく若葉照る樟の大樹を眩  
しみて立つ

持病とぞいは言ふべく頸肩腕症候群に一日  
悩み

土いきれ草いきれたつ畑のみち放されし鶏の  
びやかに鳴く

懐しき日の匂せり桑の実は過ぎたる日々をよ  
みがへらしむ

庭の木のかほすいくつも実りをり幼きものは  
みづみづとして

濁流にかたむき糊空木さく岸に雨に濡れつつ  
赤鮠を釣る

逝きしかば魂は故郷に休むべしその兄眠る柚  
の木のひとつり

大叔父田辺誓也逝去

生の証し

農に就くことを欲りつつ齡はや五十にちかき  
ことを寂しむ

人を疎み人をたふとびあるときは欺かるも  
人を恋ほしむ

他人をば踏み台にする現実にいまは嘆かずか  
つ抗はず

うち揺らぐゆゑに愛しもおもむろに心和ぎつ  
つ眠りに入らん

川なかの石にいつしらず積もりたる泥の寂し  
さ見つつ佇む

顧みるこの二十年ひたぶるに妻を恃みて子を  
育て来し

陶土搗く杵の音まどほにきこえつつ夕暮の風  
かよふ小鹿田は

休日の一丘に来て見おろせば世事の影なき  
わが家あたり

おもむろに季移りをり耕ちやんの家の裏山ひ  
ぐらしの鳴く

老しるきふるさとの父帰省せしわれに向かひ  
てただに微笑す

ふるさとの川寂しけれ年を経て澱みし流泥を  
とどむる

ふるさとの下水溜りにみみず掘る曾てここに  
て遊びたりしか

杉二本立つ川べにて生れし家の痕跡はなし夏  
草茂る

青々と稲育つ田や金融の生々しさをその内に  
秘む

老づけるありさまも子らの成長も同じ時間の  
うちにてあはれ

生かされてゐる証にて約りは「人寒ければコ  
トを纏ふ」

高原の秋はさやけく外輪の山ふところに唐黍  
みぬる

おのづから湧く侘しさや道のべに木槿花さき  
風に揺れをり

たちまちに九月はゆけり現身に解決できぬも  
のを残して

南端の町

ささやかに祝ぐことき思ひにてことし掘れた  
る山芋を食ふ

宗教の異なるゆゑの対立に銃弾あびし幼子あ  
はれ

内にもつ不安をやらふ術のなく寝ねんとぞ思  
ふ日を消すのみに

二階より景色を見んと階段より落ちたる父の  
老を憐れむ

南端の町は初冬のうららかさ畑に晩穫の馬鈴  
薯生ふる

ピラカンサの朱実に隣る狭畑は余剩地にして  
瑛植ゑてあり

曇りたるままに明けゆく遠空に影ありありと  
開聞岳そびゆ

豪延僧正健かにして久しいのうとわが顔みつ  
つ土産を賜ぶ

函子寺にて

燻れるごとき当為をもて余し臥床にをれば寒  
き風音

山よりの風さびしけれ何するとなく暮れゆき  
し夜の更に吹く

この日ごろ眼力といふこと思ふ前を見据ゑて  
人は行くべし

意味のなきごとく有る如く日を積みて四十九  
歳の生日となる

沈丁花のほふこの道苦しみの一年経てば癒  
えてわが行く

馬酔木咲く郊外にしてここにもいく枚の畑  
潰されんとす

草の香

灯の消えし水族館の横を過ぐ数千の魚眠りて  
をらん

川のべに芹伸びをらん頃かとも思ひいでつつ  
家ごもり居つ

娘らの成長とわが衰退の乖離する日々書齋に  
こもる

購ひしバナナはいまだ幼きか食めば口中に草  
の香滿つる

小雨ふる昼過にしてしたしきは樟の大樹にみ  
なぎる若葉

蟻まきのおどろに付きし梅の木の陰暗くして  
五月過ぎゆく

ひとむらのかたばみの花庭なかの粗きバラス  
に張りつきて咲く

時折はわれにやさしき眼を向くる娘となりて  
娘まぶしも

夜に降るさみだれの音幾万の蝸牛のたぐひ育  
まれぬん

消極に向かふ心を制せんと虚しけれども体操  
をする

霊山の頂とほく草いきれ立つ梅雨晴の道上り  
ゆく

山中を歩みつつ思ひめぐらせば土にほとほと  
関はらぬ身ぞ

わが内にもつ古傷も日を経ればなつかしくし  
て山道上る

をりをりに時鳥鳴く山の道湿る朽葉を踏みつ  
つ上る

おのづから赴くままに歩むべしわれの一生は  
われのみぞ知る

八重桜

木蓮の咲きほぐれをり夢に見しごとき光のか  
たはらを来つ

ほのぼのと明けゆく空をこの日頃見しことも  
なし勤むる日々に

底ごもるごとき風の音きこえをり夜更の床に  
覚めしたまゆら

雪柳の花しろじろと眼に沁むる頃としなりぬ  
憂ひのうち

ひすがらに黄砂のけふる街空を窓ごしに見て  
けふも働く

をちこちに菜の花咲けりわが生れし村のした  
しき田畑のほとり

音のなき川の水面を抜きいでて緑みづみづし  
クレソン生ふる

傍らに積む野の石はいにしへの墓かもしれず  
暮れゆかんとす

ふるさとに咲きあふれぬる菜の花に過ぎて戻  
らぬ時をおもひき

情けなきことにて今夜も酔ひ潰る嗚呼ふるさ  
とは心に遠し

社会人となりたるわれを喜びくれし財前先生  
逝きて三年か

今宵また床に臥しつつ風の音なき静寂に耐へ  
がたく居る

しがらみの解けたるあした八重桜の光のさや  
ぐ傍らをゆく

管理されぬ象の群そのことを知らざる背中  
さびしく歩む

昂りしころのいまは鎮まりて庭の空木の若  
葉をあふぐ

冬越えて青く伸びたる麦のことをり思ふ  
泪ぐましも

歩みゆくみち延々と続きをり夢にて木蓮の花  
あふれ咲く

黄花鬘の花をこの頃摘むこともなくて感動な  
き春が行く

もの言はずただに粥食ふ父となり終焉ちかき  
哀れをまとふ

ふるさとはいつも静けく山藤の花むらさきに  
ことしまた咲く

うるほひて咲く石楠花の花に遇ひ抱かるるこ  
とわれは佇む

変りなくいまも流るるこの川の水音やさしお  
もき心に

藁縄を機械にてなふ事業して父は一時かがや  
きにけり

工廠を退き来し父がその兄に馬一頭の土産せ  
しとぞ

父詠みし句にしてあはれ「竜胆のみち延々と  
苦死の夢」とぞ

梅の若葉

小雨ふる山に來りてわらび摘む草のかをりの  
泪ぐましく

八重桜の散り終へて雨ふれる午後街の明るく  
みゆる寂しさ

こでまりの花しろじろと光り咲き人けなき村  
の道帰り来つ

さががけて卯の花腐しの雨のふる音をききつ  
つ時をゆかしむ

自らは挫折ならずとうちしづむ心の中にくり  
かへしぬき

いのちをば養はんとて家ごもり幾日かして日  
付を忘る

順風を受容するなく自らに克つべく逆境を選  
び来りつ

曇りつつ過ぎゆく一日庭なかの梅の若葉が音  
なく見ゆる

灯  
火

雀らの声するゆふべ虚しさをうちに秘めつつ  
夕暮れを待つ

先生はいかにおはさん蛇崩を歩みて訪ひし日  
々も遙けし

庭畑の薔薇やすみれを常詠みて独り住まへる  
先生おもふ

暮方の居間にむなしく居たりけり窓通りくる  
風を受けつつ

茫々と春は行きつつわが内にほのかに未来へ  
の灯火ひとつ

収  
束

やうやくに子ら成長し父われは老づくらしも  
多くを欲らず

をとめこの眼をりをり吾を見る逞しき父望み  
てゐんか

窓そとの青空のもと鴉らの飛びゆくが見ゆ餌  
を探すらし

生じたる波乱ひとしきり収束へ向かひゆくら  
し夕べやすけく

雲雀鳴くこゑ限りなくやさしけれこのときの  
まに命はいこふ

やすらかにただ安らかにあらんとぞ窓より見  
ゆる青空あふぐ

空とほく音とどろかせ飛機がゆく世界事情は  
ここにも及ぶ

しんしんとしづもる朝の庭なかに檀の若葉日  
に照りあたり

庭なかのかぼすの木はや蓄つけ頑なりし心  
なごます

蛇崩の桜の花ははや散りて葉のそよぎぬ彼  
の日の如く

先生の遺品のスコッチウイスキーいまも大切  
に書棚に飾る

矢を放つまへの充実禅にいふ未発の中のごと  
くわがをり

こぞの秋山に拾ひし団栗がプランターにてい  
くつも芽吹く

をとめごの眼の光このひごろ大人のごとき鋭  
さをもつ

幼き日柿の木の梢すれすれに戦闘機過ぎしい  
まも忘れず

この春も尽きんとしつつ腹中に何かをなさん  
意志をはぐくむ

野  
薊

病室に父は縮まり  
みたりけり声かけしかば  
少しなづく

若葉色せる両子山  
ふるさとの小さき橋の  
ほとりより見ゆ

春たくる古里の野  
辺ぎしぎしの赤き穂  
花が風にそよげる

幼き日遊び呆けし川原は藪としなりて寄る人  
もなし

をちこちに野薊の花さく見えて春ゆかんとす  
わが生れし村

ことしまた虫の生れん細川に緑あたらしクレ  
ソン生ふる

甥子らはおもふなからん古里のかくも寂しく  
見ゆる山々

しやがの花咲くころならん萌黄色したる両子  
の山ふところは

集落を見渡す位置に鉄骨となりし火の見櫓遅  
しく立つ

部屋なかの造花に埃積もるなどゆゑなき孤独  
かくして及ぶ

馬頭星雲

ぬばたまの夜のしじまのしんしんと傷みし者  
は眠らんとする

さみだれの音をききをり幼き日藁葺屋根にあ  
りし雨音

さみだれの降る音きけば幼き日蟹を拾ひし道  
おもひいづ

譬ふればアメーバに似るわがこころ悶々とし  
て触手の出でぬ

小鳥らの鳴く声きこゆあかつきのこの安心を  
床によるこぶ

馬頭星雲に星二つ生れゐるといふ過去の光は  
今を明かさず

ゆたかなることにて時に思ひいづ銀河の中心  
より噴くジエツト

自らの個体にひとつ我といふ意識のありてか  
くも憂ふる

さみだれの止みたる庭に出でし時かぼすの花  
の甘き香のする

風のみ音

歩みゆく冬枯れのみち夢にして風の運びくる  
風のみ音

夕暮にかつては鹿の鳴きをりし村にて鹿は滅  
びにけるや

めだかなど掬ひしことも遙けしと菜の花長く  
る川のべに立つ

黴臭き空気のこもりぬし処納戸に遊ぶ子らい  
まはぬず

蓮華さく田に寝転びて仰ぎみきそこはかとな  
き天空の蒼

用のなき知識に溺れいつしかに素朴のこころ  
忘れぬたりき

窓外に小鳥鳴くほか音のなき一時のあり家に  
居て知る

忙しく人働くは何ゆゑとしばしばおもふ家ご  
もりつつ

萌えいでし山の若葉に傷みたる心の癒えし日  
々もありたり

過ぎゆけばなべて美しからんとぞ夜更の床に  
ひとり祈りつ

現身にやがて来らん終末を待つが如くに時を  
消しをり

抱きたる希望は細りゆかんともいまは諾ひ眠  
らんとする

しづやかに降るさみだれや頑なな心ゆるめて  
明日をぞ待つ

乳飲子はいつしかをとめとぞなりてわれをあ  
はれむ瞳寂しく

飼犬はかくも老いつつこの日ごろ声をかくれ  
どひたすら眠る

たは易く不可のルールを作りゆく知の貧困を  
思ふをりふし

しんしんと静もるこころ底ひより何かを為さん  
おもひの萌す

雲の散消

賜りし葉書にわれを見守るとありぬ遠く住む人の  
やさしさ

さみだれに思ひきりふる一時のありて大策を漏  
るること降る

蛭子のはや潜みぬふるさとの藪なす川の葦生  
のほとり

病み臥す父はいかにやおはすらん浅夏の雨さむ  
く降りつつ

窓外に母子語らふこゑのして遠ぞきゆきし後の  
雨音

おもむるに時は過ぎつつ古里は山苜の花さく頃  
ならん

葛飾に親しみし日々遙かにて旅の終りのごとき  
寂しさ

お花茶屋にて文芸を育みし昭和末期の日々はし  
きやし

江戸川のほとりに穂草そよぎぬしことも幻わが  
老つきぬ

狐塚の興慶寺にて禅組みしことはその後のわが  
身に根づく

未明よりさみだれの降る音ぞする心の襞に沁む  
るその音

楽しかりしこともありしが来し方は譬へば雲の  
散消に似る

ふりしきる雨の音のなかゆくりなく車を起動する音ぞする

雨の降る波動にひたり眠らんか大いなる魔を逃れしわが身

古里の川ぞしのばゆつつましきよしのぼりらも命継ぎぬん

日すがらにさみだれ降るは億万の魂いまし此岸  
に還る

あとがき

本集は、「菜花爛漫」に次ぐ私の第二歌集であり、平成八年から平成十三年にかけての勤めた大分県を退職するまでの時期は、東京生活の後半から帰郷後約三年間を経て長年の境遇に素直にありたいと願い実践したそのこと自体だと思っている。

小説でも詩集でも文芸なら何でもテーマが必要だと思うが、この歌集のテーマは、自分こうしてまとめると、作品には、都会生活の葛藤や旅行詠などが多いのに気づく。

旅行詠は表面的把握の傾向を免れないが、自分では根底に生活者の感慨を込めたつもりであり、一つの節目として県を退職し、医療法人敬和会に福祉関係の職を得るまでの、人生における貴重な経験の記録として大切にしたい。

歌集名を「聴風」としたのは、次のような経緯からである。平成十年の十月、歩道の秋葉四郎氏が、本県において開催された文化庁主催の行事・国民文化祭に短歌部門の講師として来県され、その折わが寓居を来訪くださり懇談の機会を得た。

そこで私は、前々から自宅の屋号にしようと考えていた「聴風庵」を、東京時代に何かとご指導賜った秋葉氏に命名してほしい旨願い出たのである。

秋葉氏は快諾くださり、しばらくして、「庵というのは少し古いな、「聴風居」がいいよ。一階から海も見えるんでしよう、じゃあ、「潮見聴風居」で通称「聴風居」とすればいいよ」と言われ、次の一首を偶成として私にくださった。

別府湾の潮見え山よりの風を聴く君が住む家羨しきろかも

私はその日以来、屋号は聴風居、第二歌集は「聴風」と決めていた。生涯ここを本拠地とし、写生短歌を追尋しようとの決意を込めてのことである。

歩道に入門して既に十八年、いまさらのように短歌の難しさを痛感している。しかし、写生短歌への信念はいささかも変わりない。これから先、先師佐藤佐太郎先生並びに現主宰の佐藤志満先生の教えを守り、努力していきたいと思う。

この機会に、これまでご指導を賜った主宰をはじめ秋葉氏など歩道の方々に、心から感謝の意を表する次第である。

平成十四年八月八日

田辺誓司

## 聴風舎理念

近年、社会が経済至上の傾向を呈して久しく、この間人々は、生産より消費へ、不易より流行への歩を速めてまいりました。そして、時代の流れは、わが国に営々と培われてきた精神文化をも呑み込み、いまや物的価値尺度が社会に遍く浸透しております。

一面、かすかながら新たな兆しもうかがわれます。明らかに不利な立場から正義を貫く法律家や、人道援助に生涯を掛ける活動家、また身体の不利益を反転し周囲に勇気を与える青年や、地域社会への奉仕に地道に取り組む個人の活動、等々であります。

こうしたなか、私たちはここに、ヒューマニズムあふれる社会の構築を理想に聴風舎を興し、地方にあつて文芸、哲学、種々の芸術等に励む人々の活動を、良書の普及や刊行等を通して支援すべく歩み始めました。身近に営まれる文化活動を全国の同胞とともに共済し、新しい文化の形成へつなげようとの熱意からであります。この趣意が理解を得られ、新しい時代の潮流となるよう念願してやみません。

一九九九年十月

舎主

【著者略歴】

たなべ せいじ  
田辺 誓司

略年譜

- 1952年 大分県国東市安岐町両子1910番地に生まれる。  
1975年 長崎県立国際経済大学卒業。  
1985年 歩道に入会する。  
1993年 歩道同人となる。  
1997年 第一歌集「菜花爛漫」(短歌新聞社、歩道叢書)  
刊行。

歌集 聴 風

---

---

平成22年9月1日発行

著 者 田辺誓司

発行者 寺家佳美

発行所 聴 風 舎

〒874-0833大分県別府市鶴見7組3

(TEL代表0977-25-4320)

印 刷 聴 風 舎

製 本 聴 風 舎

---

---

P2273E(本体2273円+税)